



第20回『このミステリーがすごい！』大賞受賞作

特許のスペシャリスト・**弁理士**が 特許権侵害を警告された**VTuber**を救う！リーガルミステリー 『**特許やぶりの女王 弁理士・大鳳未来**』1/7発売

株式会社宝島社(本社:東京都千代田区、代表取締役社長:蓮見清一)は、第20回『このミステリーがすごい！』大賞受賞作の『特許やぶりの女王 弁理士・大鳳未来』を2022年1月7日(金)に発売します。

本書は、特許のスペシャリスト・弁理士の主人公が、特許権侵害を警告された人気VTuberを救うべく、大胆かつ強気の策で立ち向かっていくリーガルミステリーです。選考委員からは「特許権侵害の事前交渉専門の弁理士という職業が新鮮」「リーガルサスペンス的なロジックと、VTuberという旬の題材の魅力が際立ってユニーク」と、テーマの独自性が高く評価されています。著者の南原詠氏は、弁理士として活躍しており、本書はその専門知識を生かした特許論争が繰り広げられるミステリーです。

受賞者のインタビューも可能ですので、ぜひご覧ください。
『このミステリーがすごい！』大賞は、

各書店ランキングで続々1位獲得！
著者、TBS「王様のブランチ」出演！

発売から2週間で重版決定
累計5万部突破！

※2、3枚目は、11月17日に配信した内容と同様です。著者写真は近影に差し替えています



『特許やぶりの女王 弁理士・大鳳未来』

発売予定日:2022年1月7日
予価:1540円(税込)

【著者プロフィール】

南原 詠 (なんばら・えい) 1980年12月生まれ。東京都目黒区出身。東京工業大学大学院修士課程修了。元エンジニア。現在は大手企業内弁理士として勤務。

知的財産の権利を守る“弁理士”とは？合格率10%以下、超難関の国家資格！

■弁理士とは、特許権や商標権などで広く知られる「知的財産権」に関する専門家、個人発明家や企業に代わって知的財産の申請や保護をする仕事です。合格率はわずか一桁台で、文系の司法試験に並ぶ**理系の最難関資格**ともいわれています。また、弁護士・司法書士・税理士・行政書士などと共に、8士業(※)と呼ばれている国家資格の一つです。

■「**発明を生かすも殺すも弁理士次第**」といわれており、権利の内容を書く弁理士にかかっています。発明や技術が優れていても、そのことをきちんと理解していない人が書くと、取得した権利が的外れだったということも起きてしまいます。

※職務上必要な場合に、委任状なしで戸籍謄本・住民票などの請求権が認められている8つの士業を指す

『このミステリーがすごい！』大賞とは？

『このミステリーがすごい！』大賞は、ミステリー & エンターテインメント作家・作品の発掘・育成を目的に、2002年に創設した新人賞です。これまで、第153回直木賞受賞者の東山彰良氏や、累計1066万部突破の『チーム・バチスタの栄光』シリーズの海堂尊氏、音楽ミステリー『さよならドビュッシー』や社会派ミステリー『護られなかった者たちへ』で知られる中山七里氏などの作家を輩出してきました。また、志駕晃氏の『スマホを落とすだけなのに』シリーズなど、映像化作品も多数世に送り出しています。さらに、受賞には及ばなかったものの、将来性を感じる作品を「隠し玉」として書籍化。岡崎琢磨氏の『珈琲店タレーランの事件簿』シリーズをはじめ、「隠し玉」からもベストセラー作品が多く生まれています。

2枚目
著者インタビュー





第20回『このミステリーがすごい！』大賞受賞作

特許のスペシャリスト・**弁理士**が 特許権侵害を警告された**VTuber**を救う！リーガルミステリー 『**特許やぶりの女王 弁理士・大鳳未来**』1/7発売

株式会社宝島社(本社:東京都千代田区、代表取締役社長:蓮見清一)は、第20回『このミステリーがすごい！』大賞受賞作の『特許やぶりの女王 弁理士・大鳳未来』を2022年1月7日(金)に発売します。

本書は、特許のスペシャリスト・弁理士の主人公が、特許権侵害を警告された人気VTuberを救うべく、大胆かつ強気の策で立ち向かっていくリーガルミステリーです。選考委員からは「特許権侵害の事前交渉専門の弁理士という職業が新鮮」「リーガルサスペンス的なロジックと、VTuberという旬の題材の魅力が融合してユニーク」と、テーマの独自性が高く評価されています。著者の南原詠氏は、自身も弁理士として働いており、本書はその専門知識を生かした特許論争が繰り広げられるミステリーです。

受賞者のインタビューも可能ですので、ぜひ取材をご検討いただけますと幸いです。『このミステリーがすごい！』大賞は、これからも新しい作家・作品を発掘・育成し、業界の活性化に寄与してまいります。



自身のキャリアに悩み弁理士を目指していた最中、特許論争を物語にしたら面白いのではというアイデアが生まれ、小説を書くことと決心しました。

本作は、特許のスペシャリスト・弁理士の主人公とVtuberが軸となる新たなミステリーです。特に、主人公の大鳳未来が絶対に不利と思える状況に立ち向かっていく特許論争は、自身の知識を生かしてこだわって書いた部分です。特許というルールに基づき登場人物たちが攻撃と防御を繰り広げる、いわば知的スポーツゲーム感覚で楽しんでもらえたら幸いです。

『特許やぶりの女王 弁理士・大鳳未来』

発売予定日:2022年1月7日
予価:1540円(税込)

【著者プロフィール】

南原 詠 (なんばら・えい) 1980年12月生まれ。東京都目黒区出身。東京工業大学大学院修士課程修了。元エンジニア。現在は大手企業内弁理士として勤務。

知的財産の権利を守る“弁理士”とは？合格率10%以下、超難関の国家資格！

■弁理士とは、特許権や商標権などで広く知られる「知的財産権」に関する専門家で、個人発明家や企業に代わって知的財産の申請や保護をする仕事です。合格率はわずか一桁台で、文系の司法試験に並ぶ**理系の最難関資格**ともいわれています。また、弁護士・司法書士・税理士・行政書士などと共に、8士業^(※)と呼ばれている国家資格の一つです。

■「**発明を生かすも殺すも弁理士次第**」といわれており、権利の内容を書く弁理士にかかっています。発明や技術が優れていても、そのことをきちんと理解していない人が書くと、取得した権利が的外れだったということも起きてしまいます。

※職務上必要な場合に、委任状なしで戸籍謄本・住民票などの請求権が認められている8つの士業を指す

2枚目
著者インタビュー

『このミステリーがすごい！』大賞とは？

『このミステリーがすごい！』大賞は、ミステリー & エンターテインメント作家・作品の発掘・育成を目的に、2002年に創設した新人賞です。これまで、第153回直木賞受賞者の東山彰良氏や、累計1066万部突破の『チーム・バチスタの栄光』シリーズの海堂尊氏、音楽ミステリー『さよならドビュッシー』や社会派ミステリー『護られなかった者たちへ』で知られる中山七里氏などの作家を輩出してきました。また、志駕晃氏の『スマホを落とすだけなのに』シリーズなど、映像化作品も多数世に送り出しています。さらに、受賞には及ばなかったものの、将来性を感じる作品を「隠し玉」として書籍化。岡崎琢磨氏の『珈琲店タレーランの事件簿』シリーズをはじめ、「隠し玉」からもベストセラー作品が多く生まれています。



理系の裏の王道・理系最難関資格といわれる“弁理士”の著者が描く

『特許やぶりの女王 弁理士・大鳳未来』

聞き手・ライター：大西展子

【偶然受けた第2希望の講義で、読むより書くのが好きだと気づく】

初めて小説を読んだのは中1の時でした。小学校では漫画とゲーム雑誌を読んでいたのですが、中1の課題図書として指定された夏目漱石の『坊っちゃん』を読まなければならなかったのが初めてでした。そこで文字ばかりの本も読めないことはないと思い、中学・高校時代は流行っていたライトノベルを読むように。大学ではカードゲームにハマり、ゲームに夢中で本は読まなくなりました（笑）。

僕の通っていた東工大は理系ですが、文系科目も履修しなければならず、人気講義に申し込んだら抽選で落ちてしまった。それで偶然受けることになった第2希望の講義は、テーマに関してコラムを書くというもの。100人ほどの生徒から選ばれた10人のコラムのうち、どれが面白いかを投票するんです。「コラムに定義はないから何を書いてもいい」ということで、皆好きなように書いていました。書いてはひたすら添削してもらい評価を受ける授業でしたが、そこで「読むよりも書くことが面白い」と感じたんですよ。これが一番最初の出来事でした。

【キャリアに悩み目指した弁理士、そこから小説のアイデアが生まれた】

大学院卒業後、一般企業に就職してエンジニアとして働きました。仕事がキツくて向いてないと思った時、**エンジニアを辞めて弁理士になる人が結構いることを知って、弁理士として一発逆転を狙う、そういうキャリアパスがあるんです。**ちょうど、当時の小泉内閣では「知財立国」という政策があって、3、4%だった合格率が10%まで上がり「弁理士は今が狙い目」という感じがして、目指すことを決めました。

会社員をしながら5年間予備校に通い、講師にはひたすら「没個性になれ」と言われ続けていました。法律答案では独自性を排除しなければならないからです。そんな勉強を5年、6年しているとストレスが溜まって、**没個性とは反対に「いっそ答案に物語でも書いてやろうか」みたいな心境になるわけです。それは心の声というか、書くのは嫌じゃなかったことを思い出しました。**ちょうどその頃、池井戸潤さんの『下町ロケット』が話題で、あれも特許の話だと思ったんです。ただ、法律論争や侵害論などは描かれているけれど、特許法に関する踏み込みをしていない。だったら、ガチめの特許論争を物語にできたら面白くなると考え、小説を書こうという思いに至りました。書くなら資格を持っているほうが説得力があるので、あと1年で試験勉強を終わらせようと思い、決心したその年試験に合格しました。

【日本が世界に誇れる発明「VTuber」は特許権の話にぴったり】

弁理士登録のための研修が終わったその日に、若桜木虔さんのプロ作家養成講座に申し込みました。作品は10本ぐらい書きましたが、全て特許の話です。「この内容だったら『このミス』はどうだろう」とアドバイスをもらい、『このミス』含め様々な新人賞に応募しました。

本作は、特許侵害を警告され活動停止を迫られるVTuberを救うべく、弁理士の大鳳未来が奔走する物語で、**VTuberは新しい題材かつコンピューターグラフィックの技術的な要素もあるので、特許の話にぴったりだと考えました。**さらに、漫画やアニメーションに次いで日本が世界に打って出られる産業と言われていることも大きかったです。

主人公は、どんな状況下であってもとにかく強気な性格にしたいと思っていました。今、女性が強いといわれていますけど、もともと女性のほうが男性より優秀という勝手な思いがあったので、**弱い女性は出したくなかった。主人公はもちろん、登場する女性は皆強気で魅力的で活動的であってほしいと思い書いています。**対して、男性キャラクターはイケてない人が多いかもしれません（笑）。

フィールドエンジニアや特許の調査員、興信所の探偵も登場しますが、弁理士は実際そういう人たちと仕事をしています。例えば、製品のことは技術者じゃないとわからないので、特許侵害品なのか確認するため協力してもらいます。また、VTuber・トリイの事務所社長は、もともとIT全般を手広く取り扱っていたわけですが、現実にいる彼のようなベンチャー企業の社長って変わった人が多いじゃないですか。例えば、ホリエモンにしてもスーツは着ないというか、Tシャツが定番。そういった細かな設定をリアルにしています。

【両親にとっては青天霹靂、作家の弟の反応は…】

受賞の連絡を受けた時は電車に乗っていたのですが、「えっ、嘘！」というのが正直な感想です。受賞したのがどちらの賞かわからなくなり、確認の電話を入れたぐらいです。小説を書いていることは受賞するまで言わないと決めていたので、家族は応募したことも知らず、まさに青天霹靂だと思っています。ただ、弟がライトノベル作家なので、ある意味両親には免疫があったのではと思っています。弟は作家専門なんですけど、まだ1冊しか出してないので「俺の宣伝にもなるからいいや」みたいなことを言っていました（笑）。

【今後書きたいテーマは？】

今後は、意匠権とかデザインの特許、商標権などについても書いてみたいです。例えば、高級靴ブランドの「クリスチャン ルブタン」はレッドソールが有名ですが、あの靴の底が赤いのもEUでは商標なんです。ただ、商標といってもいろいろあって、マークとかロゴの他にも色彩商標や位置商標なんかもあります。国によって、その商標権が認められていないこともあるので、特許に限らず広く書ける気がしています。